

D-11 てんかん患者にみられる幻覚妄想状態の類型と経過－発症状況を中心にした検討－

東京医科歯科大学神経精神医学教室

○松浦雅人、先崎章、寺崎太洋、大林滋、松島英介、
大久保善朗、融道男

＜対象＞当院精神神経科に通院中のてんかん患者で、幻覚妄想状態の既往または現症をもつ25例について、精神症状の発症状況と経過について検討した。年齢は20歳から63歳(平均41.5歳)、てんかん発症年齢は2歳から36歳(平均14.7歳)、てんかん類型は側頭葉てんかん17例、前頭葉てんかん5例、その他3例で、全例が局在関連性てんかんであった。精神症状の経過で分類すると、幻覚妄想状態が持続している群(持続群)6例、挿間性に出現した群(挿間群)14例、一過性に出現した群(一過性群)5例であった。

＜結果＞1)持続群の6例は、妄想状態が4例と多く、幻覚妄想状態が2例であった。側頭葉てんかんが5例と多く、粘着・迂遠の性格傾向を有する例が多かった。精神症状の発症時に臨床発作の変化はなく、明かな心因を契機に発症したと考えられる例がみられた。全例に抗精神病薬が処方されたが反応は悪く、現在も精神症状が持続している。この群は器質性精神病の範囲で考えられた。

2)挿間群の14例は、幻覚妄想状態が11例と多く、妄想状態は3例であった。側頭葉てんかんが8例と多いが、前頭葉てんかんも4例と少なくなかった。精神症状は、強い臨床発作後あるいは発作重積後に発症したもののが5例、臨床発作の消失と交代性に発症したものが4例であった。治療に対する反応はよく、多くの例は数ヶ月で寛解した。この群はてんかん病態の変化と関連して精神症状が発現したと考えられた。しかし、その後6例で幻覚妄想状態が再発しており、持続群との移行も考えられた。

3)一過性群の5例は、妄想状態が4例と多く、万能感、恍惚感、ひょう依体験など、非定型な精神病像が特徴であった。側頭葉てんかんが4例と多く、敏感・不安定型の性格傾向が多かった。経過観察のみで数日で寛解する例が多く、精神症状は臨床発作そのものと密接な関連を思わせた。

D-12 側頭葉てんかん外科治療症例の高次脳機能の変化について－器質例と非器質例による比較－

○国立長崎中央病院精神科 2)同脳外科 3)長崎大学第2生理
4)長崎大学精神神経科 5)大分医科大学精神神経科
○高橋克朗 1)、馬場啓至 2)、小野憲爾 3)、川浪由喜子 1)
中根允文 4)、藤井 薫 5)

側頭葉てんかんの脳腫瘍例ないしは薬物不応例で、外科治療が施行された患者の側頭葉切除術前後における高次脳機能を検討し、若干の知見を得たので報告する。

対象：1989年6月から現在までに anterior temporal lobectomy を施行した7症例(男5例、女2例)、うち器質例4例(左側切除2例、右側切除2例)、非器質例3例(左側切除1例、右側切除2例)。年齢は18-41歳(平均26歳)、両手利きの1例(左側切除)の他は全例右利き。発作型は複雑部分発作4例、単純部分発作1例、単純部分発作と複雑部分発作の合併例1例、複雑部分発作と二次性全般化発作の合併例1例。罹病期間は3年から21年(平均9.7年)、発作頻度は月4回から年1回。器質例では焦点部位に一致して海綿状血管腫、孔脳症、脳動静脈奇形がそれぞれ確認された。術前のAmytal testでは全例左大脑半球優位であった側頭葉の切除範囲は扁桃体、鉤、海馬回と海馬の一部を含み、左側切除例は先端部から4.5cm、海馬の切除範囲は2.0cm(1例のみ cyst除去のため頭頂・後頭移行部も切除)。右側切除例は1例が先端部から6cm、残り3例は5cm、海馬の切除範囲は1例が1.5cm、残りは2.5cm。

検査方法：高次脳機能検査にはWAISないしはWAIS-Rを用い、術前および術後2週から4週にかけて検査を施行した。結果と考察：器質例の術前の平均IQは104(言語性IQ 102.3、動作性IQ 104.3)、術後の平均IQは105(言語性IQ 102.5、動作性IQ 108.8)、改善率101%(各100.2%、104.3%)であった。非器質例の術前の平均IQは80.7(言語性IQ 78.3、動作性IQ 89.3)、術後の平均IQは89.0(言語性IQ 87.3、動作性IQ 96.7)、改善率110.3%(各111.5%、108.3%)であった。以上のように、術前のIQは器質例が非器質例を全例上まわり、平均で20以上の差を認めた。一方、術後のIQの改善率では器質例はほとんど変化がみられなかったのに対し、非器質例は110%と明かなIQの改善を認めた。従って、側頭葉てんかんの器質例と非器質例とではてんかんが脳の高次機能に及ぼす障害に異なる機序が働いている可能性が示唆された。